

1945年（昭和20年 辰雄41歳）

小池辰雄書簡（妻への手紙）（1）

（宛先）岩手県一ノ関町川街 小池順子様

（武蔵野町吉祥寺）小池辰雄

順子へのこれらの手紙は

順子と僕の間のも最も深き消息なのだから

神の外、何人もこれを無断に、ゆるしなくして

よんではならない。

* * *

——第一信 1945年3月14日（水）夜——

順子！ 出発、離別の朝は一ノ関駅頭で真心こめた見送りをしてくれて有難う。清子、歌子、信雄、それから順子の背中におぶさっていた防空頭巾の照雄、みんなの姿が駅の柵のうしろに見えた一瞬！ 笑いの中にも限りない名残りおしさのうかがわれたみんなのおもち、ただずまい、この眼底に今も刻み込まれている。これが永遠の国への地上に於ける最後の一瞬でなかったと誰が言える！ 全身の血があのと僕の身内で泣いていた。最後の列車に乗りこんだが故に、あの瞬間がもてた。二等は満員、その他の列車も窓など開ける余裕もない始末。あの客車はしかし仙台で切りはなされて、僕は乗りかえを余儀なくされた。ここでも別所の帰りの様にあやうく乗りそこなうところだった。福島からもつと南下したところでやつと腰掛けた。前に坐っていた男から満州三年の生活の思い出を聞き、そこそとそれより一時間余、なかなか面白かった。その男は大の飲み手で、酒のはなしのときはいかにもうれしそうであった。こっちは聴き手らしく調子を合わせてやったから、相手は得意にはなしつづけてくれた。ハルビンのはなしまでするには少々顔まけた。我々の聞き知らぬグロなはなしをするに至っては弱った。しかしその男はなかなかいい観察力をもっていた。満人の特徴も僕が少し知っているだけよく了解できた。上野のすこし手前で警報がなる！ 上野着は暗やみ、勝手を知らなければ歩けぬほどに。浅草のあたりに火が見えた。帰宅したのは10時すぎ。「ただ今」と言おうとしたら誰もいない。幻滅の悲哀！ 猫も居ない。シーンとしている。炬燵に紙をもやして火をおこし、いつもの様にとこをのべ、水筒の冷たい水でがまんして、消灯！ ああわが家も順子の姿が見えなくては消灯同然だ。ただ祈りのみが、神のふところに我をはこび、安眠を与えてくれた。



3月12日（月）はかくて過ぎた。13日（火）出勤、朝はにぎりめしの余りを二つやいて食べたのみ。夕方、荻窪の姉をたずねたら、夕食を食べないかと云われたので、御馳走になる。兄が蒙古の王様のお土産をわけてもらったという珍品、牛肉のゴチソウである。元氣が出る。兄から東京空襲（9日深夜の）の跡を視察したはなしを聞き（極一端をきき）、耳を蔽いたかった。惨烈！ エレミヤ哀歌を想う。我々の知人のなかにも相当被害者があるらしい。

今日14日（水）も出勤。語学科の総務とかいうやつかいな役割を仰せつかった。いよいよこれではエスケープはむずかしい。どうにでもなれと心を定める。バアサンのところから卵をもらう。わけてやりたいが何とも仕方がない。ゴボー、ニンジン、ダイコン、ホーレンソウ、全部仕入れて、今日は自炊を完全にやる。時間さえ余裕があれば自炊も大したことはないが、話相手のないということは苦痛なものだ。若いからだろう、新町のオバアサンは独りがいいといわれるが、僕はやつぱり順子と二人がいい。聖書にある通り、

「人（男）一人なるはよからず。助け手を要す」

である。とにかくあの一番大きななべに一杯、以上の四品をぶつ切りにして支那なべでいためたやつを放り込んで、醤油をぶっかけ、ふりかけと切りかつぶしを混ぜて、七厘でゴトゴトやった。大トクカマドは昇格して台所のエントツの下におき、例の調子で6合のめしを一度にたいした。2、3日はこれで間にあわせるつもり。順子がよくこびそうな御飯がふつくりたけた。順子が居なくてこれも残念だ。ゴツタ煮も一寸油じみているから大した味だ。何しろ、ほりたての野菜でもあるし、それに例の卵やきときたから豪勢なものだ。何ぞOノ字の世話にならんやである。ただまだお勝手の勝手がのみこめないのです、時間がくうのが一番閉口だ。一週間もしたらなれるだろう。野菜のカワムキは大ざっぱで土も一緒に煮たろうから、そのスープたるや特別の珍味だ。本当に！ 土にしたしむとはこのことか！ 七厘の火は例の如く炬燵にとった。後片付けは明朝のごはん支度のと同時の方が時間的に経済だから、そのまま。井上で、みそが当分来ないというのでガツカリ。空襲が今後いよいよ我々をくるしめる。

以上が、分かれてから今までの概略だ。一番もの悲しくなるのは夕方である。賑やかな4人の子らの姿もなく、一家のたのしい夕食もない。自炊の辛さよ、察してくれ。ただ信仰と信頼とが僕を神のみ手の中に置くから支えられているのだ。順子が僕に、

「おさびしいでしょう」

と一言も言ってくれなかったのも寂しいね。僕のような一面極めて繊細な感情をもった男（A型？）の気持は、順子の様なO型の女にはわからないふしがあるかも知れない。先天的なものであるならこれも已むを得ない。僕はエレミヤ、ホゼヤ型だ。しかし、信仰は僕にアモス型もイザヤ型も植えつけてくれている。僕はすべての感情を備えている。一見矛盾の様だが、偉大なる調和がその背後に約束されている。大自然の如くあらゆる要素を備えている。順子がかなり一方的な性格であるだけに僕の気持がわかってくれぬこともあるのだ

ろう。しかし人間である以上、信仰はすべてを備えてくれるよ。

さて順子、この第一信が今生の最後とならぬと誰が保証できよう。僕は、順子への手紙を僕の遺言とし、絶筆とも思いつつ毎回書く。人間辰雄を順子に語る！ 順子を信賴するが故にこそ。過去11年余の結婚生活を顧みる。夫として最善をつくし得なかったことをお詫びする。10年の中に一つの仕事も完成できなかったことも不甲斐ない。しかし、「詩篇」と一大叙事詩「神の幕屋」は一生涯の仕事なのだ。それが戦争のためおそらく未完成に終ることは千載の痛恨事だ。信雄か照雄か、それとも清子か歌子の子らの誰かが、僕の志を継いでくれることを今から祈る。そのためには順子！ 子らの教育に全心を傾けてくれ。信仰あつて、考えの深い人間になる様に。何よりも順子自身の垂範と祈りとを以て！ モニカの様に。愛が第一だよ！

「神の幕屋」の構想が成ったら書いて送る。

僕は順子は何故、聖書をよまぬかがわからない。何故もつと祈らないの。順子は宗教心の欠けた女なのか。それならば今に神様が順子にどうしても聖書がなければ暮らしてゆけない様な恩恵を与え給うだろう。そのとき聖書を顧みないのならもうそれまでだ。

何故、塚本先生のくださった聖書を重くてももつてゆかなかったのか。僕は家庭集会をしたのも、母と順子のためだったのだ。僕の祈りは今までのところ見事にぶち破られた。僕は中途で病にかかった。しかし、とうとうエレミヤまでたどりついた。エレミヤの祖国滅亡を眼前にしての預言を学んで、集会も解散した。それがあつた深刻なる摂理でなくて何であらう。天の藤井先生は僕の志と心とを充分みとめて下さったと信じ、ただひとり慰められている。天の兄さんも然り。子らが居たためとは云え、順子は何故僕の集会を真心こめて助けてくれなかつたの。一分間でも心から祈りを共にし、僕をばげましてくれなかつたの。僕は本当に寂しかった。順子の愛は僕に対して充分であつたと云えなかつたね、この意味において。僕の勉強がもつと進むはずであつたのに。夫の力の半分以上は妻のかくれたやさしい心のこもった愛の慰めとはげましによるものなのだ。今からでも決しておそくない。心しずかに僕のために祈っておくれ。それが僕への最大の奉仕であり、愛の賜である。僕も随分、順子を失望させたかも知れない。けれども、僕の心の底には深い愛情が順子に捧げられてあつた。僕はそれなのに正直のところ、順子から本当に深い愛情を以て慰められた経験をハッキリ思ひかえすことが出来ない。順子がしかし、心の奥で僕を愛してくれたのであつたことは信ずる。順子の性格がそれをこまやかに現わし得なかつたのかも知れぬ。それなら已むを得ない。

一ノ関の最後の夜、順子は何故、照雄を抱いて僕を抱いてくれなかつたの。照雄はいつでも抱ける。しかし、辰雄を抱く夜はあの一晩のほかにはまたないのかも知れない深刻な現実ではないか。順子は僕の心をよく察してくれなかつた。十年！ それを顧みながら、僕はあの晩、眠れなかつた。先天的性格と、家庭教育とが影響して、順子は僕の愛に充分応



え得なかったことは事実だ。

率直な僕の言をゆるせ！ 僕は順子を過去の故に責めようなどと思っていない。ただ順子にこのことをこの際一言せざるを得ぬものにせまられた。十字架の下でこれを云う。ゆるしてくれ。

順子よ！ 我々の結婚生活は第二期に入った。四人の子らを与えられ、順子と子らはこの戦禍をのがれてまことに奇しき摂理の御護りの中に大バビロンを出で、山村に次の日本の黎明を待つこととなった。四人の子らの教育は順子の課題だよ。しっかりやってくれ。教育ある人の如く、信仰ある母らしく、気品高く、愛情深き母として更生一番、しておくれ。新町の母は順子のよく知る如き性格の人であるから、それにまけて子らの教育にあやまりがあつてはならぬ。僕は東京で出来る限り畢生の大業のため力をつくす。特にそのため祈り、僕が空爆下安泰ならんことを祈ってくれ。これが完成すれば、

「わが事^{おわ}畢れり」である。

神に感謝せよ！ 順子と子らが9日の大空襲の前夜に東京をたち出で得たる、過去2、3ヶ月の一切の経過にあらわれたる神の恩恵に！ しかも、今日学校で偶然、となりに坐つた（食堂で）教育科の上野君と語りたるところ、上野君の郷里は一ノ関で、一ノ関女学校への途を更に西北進した十二神^{ジン}というところの60年来の旧家の人であることを知つたことだ。そして同君が親切にも、

「野菜やたき木等おこまりのときは私の家をたずねてくだされば御融通出来る」

ということであつた。折を見て、上野君のお宅をたずねてごらん。相当広い一角らしい。十二神の上野といえは誰でも知っているのだろう。またその辺は山よりのところで、地所もあるかも知れないからそれもとずねてよいだろう。

かく護られたからには、順子よ、責任は重いぞ。恩恵のますところには責任もますのだから。僕の亡きあとをしつかりたのむぞ。僕も全力をつくして神の護りにする。順子と再会の折も与えられんこと（地上で）を切に祈る。しかし、武蔵野に散つたとしても、松陰先生の如く、永遠にこの魂は武蔵野に生きる。いつか還り来りて、わが戦をつづけよ、子らと共に。天上から祈り、且つ共力する。順子をいつまでも抱きつづける！

要するにローマ書8章にある如く、

「キリストの愛より我らを離れしむる何ものもない!!」

神の幕屋指して進まん！ 豊かなる偉大なる希望と強い信仰と深い愛の中に永遠に我らは生きん。欠点のあるのが人間だ。僕の方が順子より欠点が多いに相違ない。順子には外の人にはない美しいものもある。神様は順子を愛して居られる。僕は神の次に順子を愛している唯一人者だ。期が来たら山野を越えて再会しよう。

僕の矛盾の如き言の中の強烈な真理を順子は知ってくれよう。すべてを十字架の下で



いておくれ。涙を共に、よろこびを共に。復活と再臨のよろこびが我らをつねに進ませる。では、御キゲンヨウ。朝起きたとき床につく時間、お互いに「おはよう」と「おやすみ」とを心の中で交わそう。祈りは何よりも現実な力であることを体験しておくれ。

順子！ おやすみ。14日10時半。辰雄。

*

出立の瞬間、僕が順子と書斎で祈った祈りがこの家での二人の祈りの最後であったかも知れぬ。おそらくこれは事実となろう！ 噫!! そのとき僕も胸がさけそうだったし、順子も泣いた。しかし順子が僕の信頼するに足る女性であることを確信しているから、僕は安心していつでも死ねる。

文子さんにも新町の母にもよろしく。荷物はとどいたか知ら。早く移れるといいね。僕への手紙はすべて速達でおくれ。僕もそうする。時間が短縮されるのと、安全にとどくから。（15日朝）

（二伸）

○ 学校へ第一生命が出張して「戦時死亡傷害保険」を勧誘、みんな加入した。僕も考えた揚句入ることにした。これは一年限り。辰雄5千円（掛金15円）、順子3千円（9円）、子らはみな2千円ずつ（6円ずつ）、計48円であった。いずれ証書が来たら送る。

○ 隣組の加藤サン、佐藤サン、Oノ字には何かを世話にもなろうから時たま挨拶をして置いてくれ。

○ 山本、荻窪、塩尻へはなるべくはやく御挨拶を！

○ 疎開証明書がそっちにあつたら送っておくれ。

○ 名古屋も大阪もひどくやられた。大惨烈。

○ 衣料疎開はなるべくはやく手続きをするつもり。

○ 何しろ留守居人の居ないのはたしかに不便だ。何とかしたいと思っている。山本にも話してみた。しかし、意外にきり抜けられるかも知れぬ。もう少し状況を見よう。そのうちに入りたいと申し込む人も出て来よう。

○ 今となると、いろいろ順子から実地訓練を（炊事の）うけておけばよかったと思う。今朝からは食後直ちに食器をあらうこととした。

○ 東京はケイホーが出た。今日中には機動部隊の艦載機とビー29とがくるかと想像される。また東京の相貌は変わろう。この辺だつてキット今に焼かれる。カイゲンレーとなれば籠城だ。いよいよ来るべきものが来りつつある。順子！ ……………。

○ 万感交々、無限の想い。天国で一家の者たちが相抱擁している画が画でなくなってきた！ 我々の現実、終末的現実の事実となつて来た。涙、かなしみを通して強く立ちあがるよ！ 片どき僕を忘れてくれるな！ 僕も順子をつねに抱いている心の中で。サヨナラ。15日朝。



——第二信 1945年3月15日（木）曇——

順子！ 辰雄。これは日記でもあり、手紙でもある。順子にこれを書くのは僕の楽しみである。そして、日記はつづいてもこれを手紙として私信の発送をゆるされるのはそうながい間とは僕は思わぬ。僕には丁度、預言者の如く、日本の将来が見えてしかたがない！疎開している順子たちもいつまで平穏であるかわからないから、しつかり覚悟をしておくれ。

鉄道、鉄橋を破壊されるのも間近のことと思う。そうなれば直ちに音信不通である。だから、書けるときに出来るだけ書く。順子も手紙やハガキを毎日の様に書いておくれ。順子からのたよりより僕のなぐさめとなることは地上にはないのだから。

順子の着てねていたカイマキは僕が使うからおくらないよ。子供たちの日記帳や、画や、チャンチャンコや、オモチャや、いろいろな断片がのこっているが、どれを見てもいのちが通っている気がして、手ばなし難い、少しずつこちらに置く。みんなでとった写真——一ノ関でもとればよかった——それからいろいろなシロート写真、これは僕の室をかざることになる。結婚の日の写真も時に出してみることになる。コリント前書13章の聖句が身に沁みる。順子よ、聖書の文字の背後にある歴史と預言と血と涙と希望をよく読みなさい。

戦争と時局に対して意見があるが、そんなことはここに書くことをやめよう。要するに日本は天譴^{てんけん}をうけつつある。僕もその一員として死すべくば死なり。しかし、僕の祈りは死なない。僕の魂は断じて死なない。神のものだもの。いつか完全な霊肉をあたえられて楽しき天国生活を順子たちとすることになる。これを思うとき僕は何人よりも幸福だ。理想の日本がその日に天上で成就する様に！ 新しき地、新しき武蔵野を思う。

*

今日は昭和医専へ所要あつて行つた。池上君にあつた。やつぱり家はなかった由。でも何とかしようと思つていた由。僕が自炊をしていたと聞いていたく同情してくれた。親切な男だ。僕が焼けたされたらいらつしゃいといってくれた。この間の大空襲のときは、池上君のところですら腕時計をかざしてみれば赤い空の反映でどうやら針がよめるほどだったという。僕たちはソドム、ゴモラより救いだされたロトの一家の様だったわけ。

上條先生の家も焼けた。今晚あたりまた来るのではないかと（Bが）思われる。順子と言つていた様に。Oノ字は本当に親切なのか疑問でもある。かなり自己本位なところがある。土佐の人間には義侠心の強い美点がある一面、我が強いためだろう。勿論、感服すべき点もあるが。佐藤さんはやはり郷里にゆかれる由。加藤さんは名古屋で遭難、危うくいのちびろいをして来られた。病院を焼けたされたのである。



夕刻は昨日のゴツタ煮の一部を煮かえして、ごはんをふかして卵やきをしてすませる。ひとりのゴハンはおいしくないものである。ニューシティーのマザーがよく食事どきに、まずいの何のといわれるが、子供によくないから順子はよく気をつけておくれ。神様のくださったものを心から感謝する敬虔な気持は子供のうちから養われねばならぬ。何のための食前の感謝であろう。ひとりはおいしくないが、しかし、主イエス・キリストが共に居てくださるのだと思ったとき、味が一変した。順子たちを思つて寂しくもあり、にぎやかにも思う。

一ノ関の寒風でやや風邪ぎみとなつたのが未だとれない。独りでねては大変だから用心する。あしたは学校を休むかも知れぬ。三品さんが来ない。少し心配である。こんどの疎開が出来た経済的な力は本を売ったこと、それは全く三品さんのおかげであつたのだから。三品さんに順子からも感謝のおたよりを出してくれ。あて名は、荏原区東中延町□番地、三品要二様。切符は北村さんのおかげ。御自宅の番地を今知らないから、渋谷区大和田町□番地、東京急行電鉄株式会社新宿営業局庶務部長北村様と宛名して出しておくれ。

僕のこれらの手紙はよくよんで大切なところはサイドラインをして置いたらいいと思う。僕は日に日に人格を完成してゆく。だから、順子も日に日に立派な日本婦人、クリスチャンになつておくれ。こんど会うときはどんなに楽しいだろう。こうして離れていることはお互いによい試練なのだろう。神様のなさることは最善へ我らを導き給うためののだから。なかなか忙しいだろうが、しずかな祈りの時を必ずおもちよ。いのりの気持はいつでもてる。そこに魂の故里を発見するだろう。そこから、真の言も行いも出てくるだろう。

ここまで書いたら兄さんが見えた。魚のカスツケをいただいた。大いに精力素だ。一時間半ほどいろいろ話した。姉さんも近日、平口さんと疎開される。くりかえし思う。順子たちは本当にいいとき行つた。東京は罹災者百万という事だ。列車は大変である。

思いつくまま、どんどん書いて置く。将来は僕のなきあと、経済的には、ニューシティーに御厄介にならねばならぬかも知れぬ。それはそれとして順子も母の様に独立して子らを育てる心準備もしておくれ。

僕の本は出来るだけ売ることにする。あとは壕に入れて土をかぶせておく。今の空襲は絶対に焼かれる、家は。消そうなどすれば生命があぶない。皆、焼夷^{しょうい}バクダンだから。いろいろな話をきいて、そのものすごさと思う。順子もなるべく現金でもつておいで、郵便局もそうあてにならない。ニューシティーにも然るべく話しておおき、一定のお金は現金で身につけている方がいい。2年間位の生活費は。

また将来、何かと佐藤君や中井君のお世話になろう。清子や歌子の結婚のことを今からいうのもおかしいが、年齢からいっても同信の友人という安心からも、まず佐藤君の男の子らが恰好ではないかと思う。中井君の方は同年輩からだから少しこまるだろう。戦後策（アメリカの）によれば日本の婦人によつて混血児をつくり日本民族を台無しするそうだが、も



し本当に実現するとすればゆゆしきことだ。順子も充分ケイカイしてくれ。こんなことは思うだに憤激の極みだが。

東京にカイゲンレイ「戒厳令」の布かれるのも間近らしい。いよいよ来るべきものが来た。こんどあうときは傷病者としてか、天国人としてかであつて、今のままの僕ではないと覚悟してくれ。順子がいとおどろかないために今から預言して置く。

いやなことばかり書いてごめん。しかしこれが現実直観なのである。わが魂はどん底をゆく。そこから天に達する気魄と不屈の健魂が生まれる。神の勝利！これだけは絶対にまちがいが無い。我らの信ずる神様が勝ち給う！これよりよろこばしいことは我らにない。

順子よ、愛する妻よ、僕と一緒に高らかに神を讃美してくれ。神を棄てた人類は亡びる。神を信ずる少数の人たち。正直な子供たち、正直な人たちだけが救われる。エス様が子供を愛された心事が今こそしみじみわかる。

順子よ、子供たちを真に愛せよ！子供たちに僕を忘れさせるな。父は今より永遠に子らのために祈る。僕に分までも子供たちのために尽くしてくれ。僕と順子の血の延長なる子らだから。

愛する順子、おまえを抱きながら——心の中で——これから床につく。ではおやすみ！10時すぎ。辰雄。

（二伸）、明日は歌子の誕生日だから、子らの一人一人にあてておたよりする。ニューシティーと文子さんによろしく。

——第三信 1945年3月16日（金）——

順子へ、辰雄。風邪がひどくなって寝ては困るので今日は欠勤。午後から順子たちの残りの荷づくりをやる。方々に散在していたので——壕の中にもあり——うまくとりまとめるのに時間がかかり、完成したのは夕方に近かった。家のなかにも僕流に改造、いろいろな勝手を防空壕に一元化。家はやけても大切なものはやかめようにととのえつつある。家はやけるものと覚悟。アメリカは次の大空襲の準備中らしい。不気味なしずけさである。

三品さんは今日も来ない。教文館もやけたかも知れない。三品さんにけががなければいいが。

東京の疎開が急に進捗しつつある。このとなり組でも動きがみえる。老幼は半強制的であらう。Oノ字も動くらしい。

今日は歌子の誕生日、僕の父の御命日。彼岸というのにうらさむい。戦争のためもある。晩は歌子におめでとうをいいながら、ひとり祈る。御馳走は、ホーレン草のオシタシ、オ



ロシ、例の4品のゴツタニ、ムシゴハン、サカナのカスツケ、カズノ子を煮たけれども失敗。方法をあやまったのだろう。順子にコーチしてもらったはずだが忘れた。ねこが昨日あたりから姿をみせる。魚のあまりをやったら大よろこび。ゴハンはやるヨユーなし。何とかやっている。動物は全く神様によって生きているのだから、あまり人間的にせぬ方が生活力が強いのだろう。その証拠にのら猫ほど太っている。

別便（同封のもの）子らへの4通、子供たちがよんだあと順子が大切に保存して置くように。みんなが大きくなったら、お父さんの気持がわかってくれようから。順子はそのつもりでよく指導しておくれ。今までは幼児育てだったが、これからは子の教育であることをよく自覚しておくれ。学校より大切なのは家庭だから。

*

詩「神の幕屋」の構成

朝に昼に夕にわが心を専らにするものは「神の幕屋」。詩の書き出しは東京の大空襲とその猛火の中から僕が天へ昇るところから始まる、エリヤの如く。火の空から大東京をみおろし、生い立ちを想う。僕は浅間山麓に降り立ち、日本が何故かなくなりしかを独白し、日本の歴史を回顧する。日本のために祈りて林間に眠ると、鷲が僕をくわえて独乙の森の中へ移す。目さめてみればチュービンゲンの黒森の山間である。そこで独乙の一老人に会い、彼の告白をきく。彼はドイツの過去を物語り、現実危急の独乙のために切々の言を吐く。僕もドイツの世界に貢献せし文化的不滅の業績をたたえ、独乙文化の不死をといて彼をなぐさめ、共に祈る。

一夜をその森にすごして別れを告げる。昨夜の鷲がとんで来て僕をスイスのアルプスに移す。平和の国スイスの山間水辺に逍遙して人類の平和のため想う。現実と理想の甚だしき背離に聖書の歴史観のただしきを語る。相手はヒルティ先生の手紙を愛読する牧童である。

鷲は三度、私を翼に乗せて天高くのぼる。ある高さまでくると美しい虹が現われた。鷲はその虹の一端に私を置いて降りて行った。私は虹の橋を渡って——それは第三の天へ架せられてある——未だかつて何人も想像しなかった空間に——第三の天とパウロのよびし空間であろう——入る。その空間を構成する要素は黙示録的世界である。パラダイスはその形態。以上が「神の幕屋」前篇へ日本、独乙、スイスのあらずじ。その長さはダンテの神曲の地獄篇に相当する。

中篇に於て藤井先生に会い、先生と共にその世界パラダイスの構造を学ぶ。遍歴しながら。そのうちに突如、地上の歴史の幕がとじる。大天変地異!! それは啓示的な夢の形で。

後篇に於ては、審判をへて、救いに入りし人々がどんな人々であるか。それがいかにこの世の尺度と異なるか、その永遠の国に於て、地上の歴史にあらわれし民族はそれぞれいかなる地位を占めているか。新天新地とは何を意味するか。この世界と地上の世界との関



係はどうであるか。その民族の中の個人々々がどんな課題を負っているか。その平和はいかにしてあるか。神の幕屋とは何を意味するか等が明らかにされる。世界的諸宗教の間の大問題もここで解かれる。かくて、栄光は万有を創造し給いし父なる神に帰せられる。天の父の愛が一切である。キリストはかかる神を信じ給うた。

以上、全百歌を以て完了すべきことをダンテの神曲の如し。

この歌の特徴は、終末の世界についてダンテも語り得ざりしことを語るところにある。藤井先生は聖書の結婚観を中心とされた。僕はそれは勿論織り入れて更に、神の無限を中心とする。キリストの山上の垂訓がキー・ノートである。

順子よ、僕は今から3年、山にこもってこれのあらましを完成したい。神もし之を——この詩作——よみし給うなら、僕を大空襲の中でまもり給うであろう。しかし、僕にこの詩を地でゆくのかも知れぬ。そのときは天上で書く。誰か、わが子らの中、これを書きつづけるものあらん。僕はあと20年でなければ（還暦の頃）これを真に書きあげることは出来ない。——噫！ ではおやすみ。神の愛、順子と子らの上に聖くあらんことを！
3月16日。

*

順子！ ハガキでもいいから毎日書いておくれ、速達でなくていいから。僕がひとりであることを想えば、順子も僕のさびしさを察してくれよ。時々、僕は何ともいえないさびしきにおそわれる。どうしてこんな運命になったのだろう。やっぱり一ノ関は遠すぎる。菊二郎さんの居るあたりならばと思う。

この手紙を書いて2時間も眠らないうちに、ケイホー、7編隊の敵が近づくという。さてはと例の如く準備に大変、トランクを庭にかつぎだし、カマまでもって出た。幸!? 敵は西にそれた。しかし名古屋は大変だろう。この手紙も壕に投げこんだら、封筒があとで破れた。そこでこれだけのことを書き加えて明朝投函する。順子たちのたよりは未だつかない。38箇の荷物はついたか、心配している。衣料疎開の3ヶも無事に出ればいいが。

歌子の誕生日にこの歌の大すじを書き得た奇しきよ!! 感謝!! 夜12時。

*

*

*

（別便）

清子ちゃん。

一ノ関を去ってから4日目だけれども、お父さんは随分永い時が経った様な気がする。清子ちゃんがせっかく別所で楽しく元気に暮らしていたのに、突然お父さんが伴れ出しに行つてゐるかつたね。嬉しい様な悲しい様な気持がしたでしょう。雪の降る美しい山村をあとにして清子ちゃんの手をひいて帰る路、お父さんも言い知れぬ想いがした。でも満半年の別所生活は清子ちゃんの胸の中に深く刻み込まれて忘れられないばかりか、それが芽生え



て美しい花を清子チャンが女学校へゆく頃、咲かせるとお父さんは信じている。

未だ小さいからお父さんの言うことがよくわからないかもしれないけれども、何ごとも神様が深いお考えを以て進めていらつしやるのだから、別所から一ノ関へ移ったことが、清子チャンの人生になくてならない道すじであつたことが大きくなつたらわかるでしょう。ですから神様に有り難うございますと言って、毎日をたのしく元氣にお暮らしなさい。

よく本を読み、妹や弟たちを可愛がつてあげなさい。みんなが大きくなつてもお姉さんと慕われる様なお姉さんになつて下さい。お母様もよろこばれます。

国民学校で教えて下さった先生方の御恩を大人になつても忘れてはいけませんよ。福共の先生、武藤先生、近藤先生は別所で御一緒だったからなお更忘れられないでしょう。

清子チャンが別所へゆくときみんなで撮った写真にも一寸書いた様に、清子チャンは1934年（昭和9年）10月23日、月の清らかな夜に生まれたのです。それでお父さんはお母さんともはなして、イエス様のお言葉（マタイ伝5章8節）

「幸なるかな、心の清き者、その人は神を見ん」

から清子チャンの名前をとったのです。心の清らかな人になつておくれ。神様のおよろこびになる人に！

一ノ関は未だ寒いでしょう。東京も暖かいとはいえませんが。中井さんのおば様のお家へうつりましたか。中井さんでも4人の兄弟姉妹で不思議な様です。8人では随分賑やかでしょう。時々おたよりを下さい。お父さんは東京でひとりですからみんなのお手紙が何よりうれしいのです。

お父さんのことは心配しないで下さい。いつも元氣でいます。お台所のことも室の掃除もお風呂もお洗濯も何もかもひとりでするのでから忙しいです。これも自分のためになると思つてやっています。では今晚はこれでサヨナラ。おやすみ。

清子！ 3月16日夜、父より。

*

信雄チャン。

急に一ノ関という北のさむいところへいつてびつくりしましたか。そのようちえんに入ってください。おもしろいでしょう。信雄チャンはもうお父さんのおてがみがよめるのですから、お父さんはともうれいのです。よくべんきようしましたね。これからもどんなべんきようしてください。えもかいてください。ご本もよんでください。おとこのこですから、とくにしつかりべんきようしなければいけません。お父さんがいっしょならおしえてあげるのですが、お母さまによくおしえていただきなさい。

聖書という本はこの信の字でみちています。信雄チャンというおなまえは、神様をしつかり信ずる人になるようにとおもつて、お父さんとお母さんでつけました。お父さんのこころはいまに信雄チャンが大きくなつて、お父さんの書いたものなどをよむとわかつてき



ます。どうかお父さんのよろこぶ人になってください。お姉さんたちをよく助けてあげるような弟たちになってください。

中井さんのおともだちとなかよくあそんでいるでしょう。ではいつも元気で！ サヨナラ。おたよりまっています。

信雄ちゃん

3月16日

お父さんから。

*

照雄ちゃん。

照雄ちゃん！ 照雄ちゃんはまだお父さんの字も、言うこともわからないね。でもかみさまが照雄ちゃんはお父さんがわかるというていらした。いまに照雄ちゃんがお父さんのこのおてがみをよめるようになると、きつとよろこんでくれるだろう。そのまえになかないようにしておくれ。

照雄ちゃんは東京のこのおうちをおぼえていないかもしれないけれども、東京をでるまえ、いくにちもいくにちも、お父さんのところへちよこちよこあるいてきてだかれた、いっしょにこたつにあたつたのだよ。お父さんはむしんの照雄ちゃんのすることのうちにかみさまのごけいりんをしって、こころのなかでないた。照雄ちゃんはお父さんをなぐさめてんのつかいのようだった。信雄（照雄？）ちゃんもお父さんと三晩もいっしょにねた。ふしぎなおもいがしましたよ。

照雄ちゃんはみんなにかわいがられてしあわせだね。それだけいい子に、また立派な人になっておくれ。お母さまにおんぶして一ノ関のえきでお父さんをおくつてくれたね。ありがとう。

照雄ちゃんのお名前はお父さんのすきな第二イザヤ書と云う本からとったのだよ。大きくなったらお父さんの祈りがわかるよ。

「起きよ、ひかりを^{はな}発て汝の光きたり、神の栄光汝の上に照り出でたればなり」

（イザヤ60・1）

お母さまからいろいろおしえていただきなさい。

照雄ちゃん！ いいこだね、さよなら。お父さんから。

——第四信 1945年3月25日（日）——

第三信は僕が帰京してから届いたことと思う。帰京の汽車の中でも時折、「神の幕屋」の冥想に耽っていた。5時の列車は5時20分頃発車。ガラガラで一時は僕ひとりにすらなつた。しかし仙台で大方一杯。福島で立つ人が出来る位、しかし今日は結局、混んだとは云えぬ位の樂さ加減であった。一度、B 29が通過のため警報が出ておどかされたが、無事帰



宅。帰宅後、兄のところへ行ったが不在。それから火をおこして、ゆつくりコタツの室で例の卵やきとおにぎりを焼いて、みそ汁をつくって食べた。朝飯をぬいたので、また一食分、明朝のため残っている。晩食をすませて、やれやれと床に横たわるとその途端に警報、B29の編隊！ときたから、いよいよ東京かなと思いい、すっかり用意、カマ、ナベに至るまで庭に出す。ところがまた名古屋へそれた。おちついて紅茶をわかし、清子の15日の手紙、順子の同日のハガキ、二人の18日の手紙をゆつくりよむ。時に12時半である。東京は雨あがりですうすら寒い。（4、5日留守にすると家中がごみだらけ、順子が居ればよく掃除をしてくれるのだが……。ねる室だけを掃いた）。

斎藤とみからの手紙を同封する。僕からとりあえずハガキを出して置くから、あとでそつちから返事を書いておくれ。三品さんが21日に来訪のこと、名刺がほうりこんであつたのでわかる。明後日でも教文館をたずねて、こんどは徹底的に売ってしまうつもり。買ってくれれば有難いが。

順子の手紙の通り、またこんど突然訪ねて約束した通り。もう一度何とかして訪ねたい。コマゴマしたものもそのとき持参したいと思う。こんどは一泊位で帰らねばなるまい。そう請願休暇もとれぬだろうから。もし行けないとしても、あれだけ運べたのだから、有難いと思わねばなるまい。

話がゴタゴタするが、汽車の中から、宇都宮で関根秀雄氏が家族を伴って駅頭に居た。彼氏はリックを負っていた。疎開らしい。仙台では土居健夫君が軍医中尉の姿で乗りこんで来たが、外の軍人と話しつつづけていたので、ついそのまま失敬した。間もなく見えなくなつた。黒磯というところで昭和医専の昨年の卒業生が（軍医少尉）乗り込んで来て、こつちが知らないの、向こうから挨拶して来た。それから2時間ばかり雑談した。

Oノ字にもおとなりのS及びKの両家へも挨拶をする。Oノ字はそろそろ疎開の荷づくらしい。

*

お米はみんなよくたべる様だから、僕がそつちで話した手配を早く取った方がよい。多し程よからう。上野君の奥様とは、いい人らしいから、おつきあいをたやさぬ様に。時に何かあげたらよからう。順子は着物大臣だから。荷物がといたら早速何とか電文してくれ。明日は熊本サンへ行つてみる。

*

◎突然、一ノ関をたずね得たのしかつた。みんなのビックリした顔、よろこんでくれた顔、今も思ひだす。不自由をよくしのんでいてうれしい。戦争だからガマン。ただ勝の日まで。しかし我々クリスチャンは結局、信仰に於て勝の日まで!!だよ!! 神の勝利をわが勝利としてのみ我らに勝利ありだ。辰雄はたといどうなつても、断じて負けたのではなく、信仰の勝利を神様から与えられた事を確信しておくれ。そして、断じて死ぬのではなく、



永遠に、昨日も今日も明日も生きている、順子と共に。それを強く信じてくれれば足りる。順子がどんな気持ちでいるかはこんど行つてよくわかった。順子は多くを語らなかつたけれども。語らなくてよい。順子は深い存在の信仰の人であつてくれればよい。マルタ的でなくともマリヤ的に僕と十字架と希望を一つにしていってくればよい。子供のことも最後は神様に一任して居ればよい。大人物に育ててくれ。信仰一点張りでよい。

おばあさんにいろいろ在関中はお世話様になつたからよろしくおつたえしておくれ。お二ギリはちと大きすぎて汽車の中で一寸閉口したね。やつぱりお箸をもらつてくれればよかった。味は上でき。ではおやすみ。順子！ 1945年3月25日、夜1時すぎ。辰雄。

*

道子サンとお子様方が帰省される由。S君から22日付の電報が来た。もう日本に到着。この手紙のつくところには御帰省だろう。

○インクは、丸一の旅館の通りを更に東へ行つた左側の文具店で空き^{びん}壺を持つてゆけば売ってくれる。はやく行つてごらん。万年筆も売っている。

○桶屋の手桶、4月10日には出来ているから（12、13円）わすれずに。お父さんの名刺（陸大の）があずけてある。

○テルチャンのはしか、ノブチャンの歯、いずれもお大切に。よく看護しておくれ！

——第五信 1945年3月26日（月）夜12時——

一日の労苦を終つて例の如く炬燵によつて、順子にこの様にして手紙を書くのは楽しい。順子との会話であるから。僕の手紙は全部とつて置くこと勿論だと思ふ。さて、思いつくままに書く。佐藤勲君から電報が来た。道子さん以下、佐沼にひきあげの由。この手紙が着くころは、佐沼に着いて居られるであらう。おたよりをしてごらん。S君から僕の安否をたずねて来たが、そういう電報はこちらからは打てない。同君は心配するだろうが仕方がない。S君はひとりで上海にふみとどまるのであらう。人世の有為転変、S君の平安を祈る。

今日は士校へ行つたが、疎開のことで登校者が少なかった。予士校の運命は大体今月中に定まるらしい。東北の山形か中国の何処かららしい。それとも現状維持か。東北の山形だつたら、あながち辞職しなくてもいいかも知れぬが、語学科の運命が危しいから、辞職の公算が多いらしい。それが一番いい様に思う。本も何もかも売つばらつて2、3年の生活費さえあれば、国のためたるべきはたらきをした方がよからう。万一、亡国の非運にでもあえれば、何がどうなるか全くわからない。いずれにせよ、順子も魂の態度をしつかりきめて置けよ。魂を天につなげ！ それが一番おちつきをあたえる。



照雄のハシカはどうだね。皆の咳はどうかね。日増しに春らしくなるから、なおると思う。しかし油断なくたのむ。いろいろ不便だろうが我慢してもらおう。荷物は未だ発送してなかったので、更に追加することにした。本類（多少ほかのものも交じっている）のリング箱が結局5箱となる。みんなの本は全部入っている。僕の詩作に多少関係のあるものやレクラム版の独乙書がかなり入っている。それらの本は非常に専門のものはないから、信雄や照雄が大きくなったら是非よんでもらう。例えば、ロビンソンクルーソー、ガリバー旅行記、ホーマー、ダンテ、クオ・ヴァデス、ドンキホーテなどすべて、独乙語で入っている。独乙、英語、仏の辞典も入っている。その他、国文学、哲学、歴史が入っている。信仰の書類もある。とにかく、家庭ライブラリーが出来るようになっていくから、順子から照雄に至るまで楽しく読書生活が出来る。みんなで時間をきめて静かに読書できる様な年輩に子供らが大きくなる日を待つ。楽しい家庭をおつくり。戦争が勝っても負けても!!

これらの5つのリング箱の安着を祈る!! 出来れば本は逐次、送りたい。熊本サンが何とかしてくれる間中。

三品サンが僕の留守居中に来たが、今週中にもつと売りたいと思う。立教へのレンラクは明朝（火）つける。自転車のタイヤがそろそろ変調を来たして来て、やや心細い。はやくこの自転車で一ノ関の山野を走れる日の来らんことを。

兄さんも自炊している。昨日は、愛という女中がもつて来てくれたというオハギを兄さんのところで御馳走になる。今日の豪華版を一寸披露しようか。熊本さんが昨日くれた豚肉半片（ロース）をフライパンでジューとやった!! パンにはバターがつく（山本の兄が昨日荷物をもつて来た際にくれた）。卵は今日バーサンのところで仕入れたから、豚ちゃんにつける。何とゼイタクなることよ。ヨダレがたれるだろう!! 魚のカスツケ一ピキ。コーヒー二杯。一ノ関からのニギリメシをやく（今晚で終り）。ホーレン草をさつとうでて一寸いためたてべる。ジャガイモののこり二つ（順子はそちにジャガイモをもつて行ったね、くさらせるなよ）。ネギ二本（庭からほりだす、それも最後）。ダイコンのおろし。タクワン（一ノ関のもの）。以上をガスと七厘と炬燵の火の三位一体でジャンジャンやった。こんな豪華版はまたとないかも知れぬ。卵だけは一ノ関へ送りたいが、何とも仕方がない。こんど行くときは10位もつて行こう。

それから夜は荷づくり。中型の本箱をはずして縄をかけた。リング箱追加2箱完成。ずいぶん時間がかかる。あしたは順子が要求したものの途中で運べそうなのをまとめて一箇としようと思っている。あたたかくなるから夜具ブトンの一つその中に入れようと思う。以上4箇追加、計10箇、月末発送の予定の由。明日、リア・カーでむさしきかいまで自分ではこぶつもり。

今日は熊本へ、コモとナワをもつて行ったわけなのだ。明日、幸に4ヶつめたらそれで荷物は一段落というわけさ! なかなか苦心さ。熊本には、石ケン類を少しやろうと思う。



軍手袋も一つやった。野菜もやった。今日はチエ子ちゃんのおじいさんがみえた。海苔を5帖とやがてネギが一貫目くる由。順子がつて行ってあげたお酒と交換の由。何しろ毎日ロードーでだいぶアカだらけ。明日は風呂もわかしたい。忙しいはなしだ。家の中はどうしても掃除がまにあわぬ。順子が見たらさつそくホーキを手をせざるを得ぬだろう。Oノ字はおばあさんと奥さんと三人で突然、白石へ疎開した。果然！である。外の三人がのこつて居る。Tがやつて来て、例の如くゲンカンで長口舌、何とか弁明していたが、Oノ字の魂胆も大ティわかるさ。まあしかし、日本のためOノ字は犬死にせぬに如かず。いよいよ隣組も半減だろう。4月の状態でもつと減るだろう。僕自身もはやく何とかケリをつけたいものさ。Oノ字もこんどは石川駅長にかぶとをぬいだらしい。どうも偉れないところだったろう。一昨日はビールと野菜をもつて北村さんに挨拶に行ったら、またあがれというので、お昼の御馳走になる。例のジャガイモのふかしたのと、サーヂン（サーディン、ニシン等の小魚の総称）とパンとバタとブドー糖、コー茶、ウグイスマメ。なかなか、シヤれたお昼だ。松田君あたりと一脈通ずるものがある。一寸ヴェランダの様な日あたりのいい食堂で椅子テーブル。2時頃まで北村氏とだべる。僕のことを運のいい男だという。西オギクボのどつかで幸運をひろつたのだろうなどとヒヤカしたりする一寸面白い人だ。

上野君も一ノ関へ行つたらしい。きつとお目にかかったであろう。僕は明後日水曜28日、日直だ。29日は日赤、教文館、昭和医専へそれぞれの要でゆくつもり。では今晚はこれでおやすみ！ 忙しいだろうが、時々手紙をおくれ。何でもいいことを書いておくれ。順子！ 辰雄より。

僕のためにしっかりと祈っておくれ。東京のバクゲキははげしくなるに定^{きま}っているから。

——第六信 1945年3月28日（水）夜——

○3月28日の夜。大分暖かくなつたね。一ノ関も多少いいだろう。上野君が僕と行きちがいに一ノ関へ行かれた。今日、上野君に学校で会う。こんど奥様に会つたらよろしく。

○山本の兄の紹介で赤十字の総務部の人が（老人夫妻）拙宅へ来ることになる。それで自炊も解消というわけ。来週に実現のみこみ。4月からは息がつけよう。何しろ、自炊は自宅の座業者でなければなかなか大変だ。

○土校の疎開問題は未定だが、いろいろの事情で遠方の地へは行けないらしい。自己の進退については考慮中。順子の気持はどうだ。僕は辞職したいのだが、語学がなくなれば辞職には好都合と思う。

○第三信はよんだかい。「神の幕屋」はどうだね。構造は段々複雑になるみこみ。

○今日始めて暇を得て、風呂をわかし、センタクをする。風呂は何ともいえないいい気持ちだ。



燃料が豊富で、順子にやりたいが、おくれなのをいかんせん。

○昨日、リヤカーを自転車につけて、むさしきかいまで4ヶの荷物（中3ヶリング箱、1ヶは中型本タテ、この間のとあわせて10ヶ。6ヶがリング箱、2ヶがフトン包、1ヶがトランク（大型）、1ヶが本タテ）をはこぶ。帰りには月が出ていた。体力も盛んなものである。これらの荷物は来月上旬に出荷のみこみ。4月10日頃、一ノ関へつくだろう。順子が要求したものはとうてい入り切れない。いずれまたたずねるときに中型トランクで運ぶことにしよう。戦争だ。不便はお互いに覚悟の上。

○同封松田君の手紙をおくる。やつぱり軽井沢へ疎開！我々もあの辺にかつて家をかきりて置けばと今更の如く想わぬでもない。しかし、すべてを感謝せよ！神の恵、我らに足れり。

○隣組では杉沼さんが組長になる。半年を内規とする。Oノ字の家族は、自分がこうして自炊していると一番同情がうすい。光さんのおバアサンは秋田へ疎開される由。しずえさんは多分、軽井沢方面へ。YWCA、YMCAの関係で。

○明3月28日は久しぶりで日赤へ行くつもり。帰りに教文館に寄り三品様に最終的売却がたをたのむつもり。更に昭和へ行くつもり。

○今晚は、大豆を煮た、おサトーも入れた。大したものだ。大豆はオツパイによい由。植田が欲しそうに話したから（植田君の奥さんは8ヶ月の幼児があるというので）少しわけてやった。

○東京は妙に平穏だが、あらしの前のしずけさなのであろう。九州、沖縄方面が風雲急である。アメリカをうんとたたいてやれ！

○照雄のはしかは今頃たけなわだろう。充分大切に。もし重態にでもなるようだったら遠慮なく電報を打て！いつでも飛んでゆく。

○畠はだれかにゆずる。内田のジーサンが誰かにとりつぐらしい。誰だかあしたつきとめたいと思う。アイマイ屋にはこちらもゴメンだから。ひよつとしたらOノ字あたりでねらっているのではないかとも思われるふしあり。然りとせばケシカラン。ゆずらぬつもり。

○一貫目の小包で僕の本を少しおくりうかとも思っている。

○手紙が順子から来ない。ハガキがむしろないだろうから、今のうちに手紙ではなしをしよう。今に不通となるよ！

○僕が辞職したら、そつちで何をしようか。考えておいておくれ。赤十字はなかなか疎開しない様だ。馬鹿だと思う。

○貞子さんは離縁になるらしい。義雄が不満に思っているらしいから。その原因はむしろ保さんにあるのだろう。困ったものだ。あれだけの女はまたと得られまいに。理性なきものはドシガタイ。

○子供たちは仲々よくやっているかい。歌子は学校へよろこんでゆくかい。



○おばあちゃんは移転されたか。文子さんによろしく。気持よく暮らしているだろうね。信仰と愛とを以て互いにたすけあつておくれ。ではこれで。おやすみ！ 順子のハートを抱く。順子！ 神我らとつねに偕に。辰雄。28日夜11時半。

*

インクは空壇をもつて買いに行つたかね。丸一旅館のすこし先の左側の文具店へ。例の万年筆マガイのペンも売っていた。

町会の貯金通帳（婦人会のものに似たもの）があるはずだが調べておくれ。書留封入で送つてもらおうと思うが、一寸次便まで待つておくれ。

特に欲しいものがあつたら、はやく書いておくれ。こんどもつてゆくから。また僕のもつてゆけるもので欲しいものを念のため書いておくれ。

